

ひと

軍政下のミャンマーを記録するフォトジャーナリスト

うだ ゆうぞう
宇田 有三 さん(46)

ミャンマー(ビルマ)を17年間取材し、14州・管区すべてを訪ねた。現地で学んだビルマ語と、尾行を警戒して遠回りする用心深さが頼り。軍事独裁政権の国の奥深くまで入り込んだ報道写真家はまれだ。

ミャンマー軍と少数民族勢力との戦闘は60年を超える。兵士の迫害から逃れる避難民が国内に60万人もいると聞き、地雷が埋まる山中を探し歩いたことも。「食事は、川の小さなカエルを数十匹ゆでてご飯にのせる『カエル丼』。疲労の極みの4日目、避難民にやっと会えた。

世界を見たいと神戸の中学校英語教諭を2年で辞め、米ボストンの写真学校へ。そこで、当時内戦下のエールサルバドル難民のデモを見た。ミャンマーの内戦はもっと長いと知

り、国境地帯を含めて29回訪ねた。

ミャンマー各地を歩くうち、農業一つとつても、もみ殻を飛ばすのに自然の風を利用したり、大きなうちわであおいだりと地域によって異なることに気づいた。「効率のいい方法が広がらないのは、軍政による人々の移動の制限が一因だが、記録しないと消えてしまう」とカメラを向ける。全国を歩き記録した民俗学者の宮本常一が手本だ。撮影した8万枚の画像を整理し、著書「閉ざされた国ビルマ」(高文研)の出版を準備する。

ミャンマーへの関心が高まるのはデモ弾圧といった大事件のときだけ。写真を掲載してくれる雑誌は少ない。帰国すると、安い米を探して回る生活だ。文・写真 山本博之

